

小中の教師が共通の視点で授業を評価するシートを活用

東京都世田谷区立太子堂小学校

世田谷区立太子堂小学校と同区立太子堂中学校は、小学生が4日間中学校に通う「1ウィークブレ中学生」や小中の教師が共通の視点で子どもを見取る「授業力診断シート」の取り組みを始めた。小学校・中学校の枠組みを超えて、子どもと教師の意識が変わり始めている。

取り組みのポイント

- ◎3校の小学校から1校の中学校に行くが、進学者のほとんどが太子堂小学校の児童である
- ◎6年生が4日間、中学校で生活する「1ウィークブレ中学生」を実施。中学校で授業や部活動などを体験する
- ◎「1ウィークブレ中学生」では、小学校の全学年の担任が、中学校で過ごし授業を受ける子どもの様子を見学する
- ◎小学校の授業研究会に中学校の教師全員が参加。共通の「授業力診断シート」を使い、特に重点を置いて見て欲しい項目を中心に同じ視点で授業を見て、話し合う

●背景

6年間の成長を 中学校にいかに関き継ぐかが課題

閑静な住宅街にある世田谷区立太子堂小学校は、地域の祭りの会場になるなど、地域社会と深いつながりのある学校だ。通学範囲が広く、私立中学校に進学する子どもも一定数いるため、全ての卒業生が同じ中学校に進学するわけではない。しかし、中学校との接続を強化することは、重要な課題と捉えている。その背景は次のようなものだ。

まず、子どもの基本的な生活・学習習慣や意識の面で、中学校が期待する状態で送り出

S c h o o l D a t a

◎1929（昭和4）年開校。渋谷駅から電車で5分程の住宅街の中に位置する。「せたがや9年教育」を標榜して小中一貫教育に取り組む他、「エコライフ活動」など独自の活動も積極的に進める。



校長 吉野勇次先生

児童数 433人 学級数 14学級

所在地 〒154-0004 東京都世田谷区太子堂5-7-4

TEL 03-3413-4621

URL <http://school.setagaya.ed.jp/tau/>

公開研究会 未定

せていないのではないかとという心配があったと、吉野勇次校長は話す。

「中学校では、『話をきちんと聞ける』『言われた通りに行動できる』など、いわば当たり前のことが当たり前に出てくる状態が期待されています。そのためには、小学校低学年で行っている『母親役』のような指導を、高学年になるにつれて自立させる指導に転換しなければなりません。しかし、元々中学校を意識した指導をあまりしてこなかったため、子どもが教師に頼らずに自分で考える姿勢が不十分で、中学校での指導に戸惑うケースがあるようでした」

同校は、子どもの成長過程や指導方法を、中学校と共有し、中学校を意識した指導をもっと取り入れたいと考えた。そうすることで、中学校の小学生に対する理解も深まり、6年間で培った力がしっかりと引き継がれるという期待があった。

ただ、中学校には「子どもの自覚を促すために、環境の変化などのギャップはある程度あった方がよい」という考えもあり、その点で小中連携を進めることに対して異なる意見もあったという。10年度まで研究主任を務めていた梅田正弥先生は次のように話す。

「確かに環境の変化がプラスになることはあります。しかし、不登校に最も陥りがちなのは中学1年生で、この時期につまずく可能性がとても高いのです。学習に向かう姿勢、

礼儀やあいさつなど、9年間で系統的に指導した方がよいことについては、出来るだけギャップをなくすよう、中学校と協力し合っ

て取り組みたいと考えました」
また、吉野校長は、小中連携の取り組みを進めることで、子どもや保護者に公立中学校への信頼を深めてもらいたいと考えている。「私立中学校への進学が増えつつある中で、公立小学校の教師として、地域の公立中学校にも安心して進学してほしいという思いがあります」

教科研究の文化の違いから 教科指導の連携に課題

同校はこれまでも、中学校の教師が小学校で出前授業をしたり、小学生が中学校の部活動を体験したりといった連携は行っていた。しかし、こうした取り組みに「行き詰まり」を感じていた面もあったという。

「特に課題を感じていたのが、学力を高める上で重要な教科指導における連携でした。大きな原因の1つは、教科研究の進め方が小学校と中学校で違うことです。小学校は授業研究を頻繁に行い、学校全体で研究に取り組みますが、中学校では生活指導が中心となり、教科研究は個々に任せることが多いようです。以前から本校の公開授業などに中学校の先生方を招いていましたが、この違いが壁となり、あまり成果が得られませんでした」(梅



世田谷区立太子堂小学校校長
吉野勇次 Yoshino Yuji
「どんな逆境にあっても、たくましい心と健康な体によって乗り越え、夢を実現できる子どもを育てたい」



世田谷区立太子堂小学校
教務主幹補佐、5学年担任。「人として向上心を忘れず、常に成長し社会に立派に参画できる人間でありたい」
梅田正弥 Umeta Masaya

田先生)

中学校の教師には、自分の専門以外の教科について発言することをためらうという雰囲気があり、せっかく小学校の授業研究会に参加しても、教科指導の連携を考えるレベルまで話し合いが深まらなかったという。

● 取り組み内容と工夫

4日間中学校に通う 「1ウィークプレ中学生」

これらの課題を解決するために、10年度、世田谷区立太子堂中学校と協力して準備を進め、11年度から本格的に小中連携の充実を図っている。

9月に行ったのは「1ウィークプレ中学生」だ。水曜から土曜までの4日間、6年生が小学校の担任と共に中学校に通う(写真)。

「中学校の教室で過ごし、中学校の先生の授業を受けたり、部活動を体験したりするこ

小中接続——子どもの学びを中学校へつなぐ



写真 「1ウィークプレ中学生」で小学校にはない技術の授業を受ける子どもたち。いくつかの教科の他、中学校の生徒会活動も見学して、中学生への意識を高めた

図1 「1ウィークプレ中学生」の時間割(6年1組の例)

	7(水)	8(木)	9(金)	10(土)
1	対面式	英語	日本語	算数
2	国語	国語	技術	道徳
3	社会	プール	音楽	生徒会
4	理科	太子堂タイム	国語	保護者説明会
5	算数	社会	数学	
6	部活動体験	算数	算数	

実際の時間割。囲みが中学校教師による授業など。土曜には保護者説明会を実施

*同校の資料を基に編集部で作成

とで、中学校生活を体感させ、来春から中学生だという自覚を芽生えさせることが最大の目的です」(吉野校長)

これまで別々の時期に行っていた中学校教師の出前授業や部活動体験、保護者説明会などをまとめて行えるというメリットもあり、実施に踏み切った。いくつかの課題もあったが、保護者が通学路に立って安全を確保する、給食は小学校で作ったものを中学校に運ぶなど、一つひとつを解決して実現に至った。

期間中の授業は、小学校の担任が行う通常の授業と、中学校教師が行う授業がほぼ半々の割合だ(図1)。普段受けている担任の授業でも、中学校の教室で行うため普段とは異なる緊張感が生まれたという。通常より5分長い50分間授業であることも子どもにとっては特別な体験だ。

「5分違うだけでも、かなり長いと感じた子どもが多かったです」(梅田先生)

中学校教師の授業では、小学校の単元の内容ではなく、中学校での各教科の学び方などを中心に進めた。中学校の授業内容が小学校の授業内容とどのようにつながっていくかを説明する教師もいたという。多くの子どもが中学校の授業への理解を深められたようだ。

「授業力自己診断シート」で

小中の教師が同じ視点で授業を参観

11年度は、授業研究会の見直しも進めた。

教科指導の連携がなかなか深まらないという課題の克服が大きなねらいだ。

「本校の授業研究会に参加する太子堂中学校の先生は、10年度までは数人程度でした。11年度は年度当初にスケジュールを伝え、全ての先生に参観してもらえよう工夫しました。その結果、小・中学校の総勢約40人の教師が参加して、公開授業や事後研究会を実施しました」(梅田先生)

同様に、太子堂中学校の授業研究会には太子堂小学校の全教師が参加している。11年度は、小学校では理科と体育、中学校では技術・家庭と、計3回、合同の授業研究会を実施した。同小学校は20代の若手教師が多く、実験が多い理科の授業があまり得意ではない教師もいる。そこで、若手教師がベテラン教師の指導技術を継承すると共に、中学校教師から専門的なアドバイスを受けられるよう、教科の1つに理科を選んだ。

更に、教科指導の連携の充実を図るために新たに導入したのが、公開授業の際、参観する教師が授業を見る視点を定めた「授業力自己診断シート」だ(P.24図2)。シートには授業を構成する要素が各項目に分類され、それぞれを4段階で評価するようになってる。

「自己診断の項目は、教科の中身ではなく、授業観や指導観、指導技術など、教科に共通する内容となっています。このシートを使え

ば、中学校教師が専門外の科目を参観した場合でも、どのような観点で授業を見ればよいか明確になり、発言をしやすくなります。また、このシートは、授業者が自己評価をするためにも有用です」(梅田先生)

公開授業を行う教師は、特に重点を置いて見てほしい項目を3つ程度、あらかじめ伝えておく。参観する教師は、その項目について、良かった点や課題などを、3色の付せんに分

けて記入する。事後研究会では、小・中学校の教師が混ざるようにグループ分けをして、付せんの内容を基に意見を出し合い、模造紙にまとめて全体に発表する。

このシートを用いることによって、以前に比べ、中学校教師から、子どもへの声掛け、指示の出し方、動かし方、教材の提示の方法、学級掲示の工夫など、具体的な指摘や提案が出るようになったという。

「『1ウイークプレ中学生』は、小学校と中

**子どもと教師の意識に変化
同じ方向性で研究を継続**

●成果・今後に向けて

図2 「授業力自己診断シート」

授業力自己診断シート(大志の学び舎)					
世田谷区立太子堂小・中学校 氏名() 授業日 年 月 日 校時					
番号/分類	診断項目	得意領域	得意領域以外	得意領域以外	得意領域以外
1	授業者は児童・生徒にどのような力を身に付けさせたいのか、明確な目的を持っている。	4	3	2	1
2	授業改善を目指し、研修に連んで取り組んでいる。	4	3	2	1
3	自らの専門性を生かし、教材研究を行い、授業に臨んでいる。	4	3	2	1
4	適切な学習環境を用意し、学習活動を喚起させている。	4	3	2	1
5	児童・生徒一人一人の学習意欲・学習状況を把握している。	4	3	2	1
6	児童・生徒一人一人の発達段階を的確に把握している。	4	3	2	1
7	児童・生徒一人一人の学習状況等を基に、単元の目標を立てている。	4	3	2	1
7	【特別支援教育】児童・生徒の一人一人の障害の特性を把握している。(アセスメントも含め)	4	3	2	1
8	授業の始業・終業時刻を守っている。	4	3	2	1
9	基本的な学習のルールを定着させている。	4	3	2	1
10	的確な指示や説明を行い、集団を動かしている。	4	3	2	1
11	学習状況や児童・生徒の姿を眺み取り、対応している。	4	3	2	1
11	【特別支援教育】授業を進めたい上で、授業者の役割分担が適切に行われている。	4	3	2	1
12	授業の始めに児童・生徒に対し、学習のねらいを明確に示すことで、学習の見通しを持たせている。	4	3	2	1
13	学習のねらいを達成するための説明・説明を行っている。	4	3	2	1
14	児童・生徒一人一人に声をかけるなど、個に応じた指導を行っている。	4	3	2	1
15	学習のねらいに応じて、効果を高める教材・教具を効果的に活用している。	4	3	2	1
16	ICTなどの視聴覚機器等の特長を踏まえ授業計画を立て、学習の成果を上げている。	4	3	2	1
17	児童・生徒の学習意欲を引き出し、主体的な学習を促している。	4	3	2	1
18	授業のまとめを工夫し、学習の達成状況について確認している。	4	3	2	1
18	【特別支援教育】児童・生徒が学習に集中できるよう、教室環境の構造化を行っている。	4	3	2	1
19	専門的知識を活用し、教材解釈や教材開発に関する情報を収集している。	4	3	2	1
20	学習のねらいを理解し、単元ごとの重点内容や留意事項を踏まえながら教材解釈や教材開発をしている。	4	3	2	1
21	児童・生徒の姿を基に、学校・地域の特徴を生かした教材解釈や教材開発をしている。	4	3	2	1
22	児童・生徒の興味・関心を引き出す教材解釈や教材開発をしている。	4	3	2	1
23	単元の指導目標を踏まえた指導計画を立てている。	4	3	2	1
24	学習のねらいに対する評価の観点と場面・方法を設定した評価計画を立てている。	4	3	2	1
25	評価計画に基づき、児童・生徒の学習の達成状況を評価している。	4	3	2	1
26	適切な指導計画・評価計画であったかの振り返りを基に、次の指導計画・評価計画を立てている。	4	3	2	1
26	【特別支援教育】児童・生徒一人一人の「個別指導計画」を踏まえて指導計画・評価計画を立てている。	4	3	2	1

※本シートは「学力向上を図るための指導に関する研究『授業力』向上のためのITシステムの開発」(東京教育開発センター平成18年3月)における「自己診断シート」を基に、「大志の学び舎」用として内容を一部再構成した。

*同校の資料をそのまま掲載

図3 「1ウイークプレ中学生」教職員へのアンケート結果(一部抜粋)

◎小学校

- 終了後、子どもがたくさん思い出(プラス面もマイナス面も)を伝えてくれた。6年生にとっては、とても印象深い4日間になったようだ。
- 授業中に私語への厳しさを感じたようだ。話を聞いていない生徒は放っておかれるというシビアさを体験できたと思う。
- 中学校との温度差を感じた。さまざまな教材を工夫している先生の授業を見て、自分の授業に生かしたいと感じた。
- 授業時間が長かったと訴える子どもがいた。開始前に中学校の時間割に慣れさせる工夫が必要かもしれない。
- できる限り全部の教科の中学校の先生から教えてもらいたい。

◎中学校

- 小学生にとっては、50分授業や実技教科の体験などを通して中学生への意識が高まったと思う。
- 「中1ギャップ」は多少なりとも、解消されたのではないかと思う。
- 小学生の作業の理解力や作業速度を見ることができ、中学生の指導に対して参考になった。
- 来年、太子堂中学校に来るかもしれない児童の雰囲気・様子が見えた。
- 前もって、小学校の先生から、英語学習の様子や生徒のレベルを聞くことが出来た方がよかった。

*同校の資料から抜粋し、編集部で作成

小中接続——子どもの学びを中学校へつなぐ

学校の教師が小中連携における課題を意識する大きなきっかけです。それを発展させ、子どもを見取る共通の視点を持ち、恒常的に授業を改善するために有効なのが『授業力自己診断シート』だと捉えています」（吉野校長）

子どもからは、「1ウイークプレ中学生」を通して、「もうすぐ中学生になる」という自覚が高まり、「残りの小学校生活を充実させようと思った」「私語への厳しさが分かった」といった実感のこもった感想も寄せられた。次年度以降は、中学校で受ける授業を全教科に広げたいと考えている。

吉野校長は、「1ウイークプレ中学生」の期間中、6年生以外の担任にも中学校を訪れるように促した。それにより、教師の中学校に対する理解も深まったという（図3）。

「低学年の教師を含め、実際に中学校を訪れることで、これまで『6年間』で考えていたことを、中学校までを視野に入れた『9年間』として捉えるきっかけになったと思います。小学校生活を通して最終的などの段階まで育てる必要があるかという感覚も育まれてきたようです」（吉野校長）

また、中学校は教科担任制で、教える量も多く、小学校とは授業の方法がかなり異なることに、教師は改めて気付いたという。こうした違いを理解すれば、小学校の指導を少し変えて、ギャップを解消しようという気持ち自然と生まれてくる。

「1ウイークプレ中学生」は、中学校にも変化をもたらしている。小学生を受け入れることで、これまで以上に多くの教師がかかわることになり、全体的に小中連携への理解や関心が深まった。

「小学生の作業速度が思った以上に遅いため、導入期の指導に工夫が必要だということなど、さまざまな気がつきがあったようです。子どもの実態をじっくりと見られるため、新入生に対する心構えや準備がこれまで以上に整うことも期待しています」（吉野校長）

また、「授業力自己診断シート」により、学校種や教科を超えて授業を見合えるようになったことで、中学校の体育教師から小学校の体育の授業では準備体操が不十分ではないかという指摘を受けるなど、専門性を生かしたさまざまなアドバイスも出ている。逆に、小学校の授業を参観して、特別な支援を要する子どもへのアプローチの仕方や校内の掲示物などに関して、中学校として改善のヒントを得たといった発言もあった。

このような取り組みを通して小・中学校のつながりが深まったことは、授業研究会にも相乗的な効果をもたらしている。

「小学校の指導や子どもの実態をより深く知った上で授業研究会に参加してもらっているため、実りのある話し合いが来ています」（梅田先生）

11年度より「1ウイークプレ中学生」や「授

業力自己診断シート」を使った合同の授業研究会など、小・中学校の教師が顔を合わせる機会が増え、教師同士の人間関係もかなり深まってきた。

新たな取り組みはいずれも良い成果が出ているため、今後も、現在の方向性で研究を進めていく方針だ。

「学校現場は、それぞれの教師が創意工夫を発揮し、それを互いに見て、高めることのできる『研究所』であるべきだと考えています。教師一人ひとりが試行錯誤し、『子どもにこんな変化があったから、全体に広げてみよう』といった雰囲気の研究を進められる教師集団でありたいと思います」（吉野校長）

吉野校長が重視する

校長としての役割

多忙な先生方の意識を変えていくのが校長の役割です。小中連携では、双方の校長が課題をしっかり話し合い、教師に働き掛けることが大切だと考えます。あまり難しく考えず、まずは「子どもを見合おう」という気軽な気持ちで始められるように促しています。

取り組みの全ては、「人」の熱意で始まるものです。経験や立場にかかわらず、熱意のある人が「これやりたい」と言いだし、仲間がどんどん増えて全校に広がっていくような学校づくりを、校長として目指したいと思います。